

# 入試直前特訓ゼミ 第10回

αクラス  
国語

問題をよく読み、できる問題から取り組むこと。  
答えはすべて解答用紙に記入すること。

2026年 2月8日(日) 実施

---

受験 松井塾

# 目白研心高等学校

【国語】(五〇分) (満点:一〇〇点)

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

関東地方でも青梅杉は多摩川、西川杉は入間川、荒川を流路として江戸へ運ばれた。といっても関東地方の主要交通手段はやはり利根川水系である。この利根川流路を確立するためには、利根川の瀬替工事がおこなわれている。もともと利根川は今の羽生市付近まで来ると何本もの小川へと乱流し、江戸湾(東京湾)へと流れこんでいた。それを赤堀川という人工河川を掘ることによって、銚子へと流れていた常陸川(広川)と結び、利根川の今の水路をつくりだした。

こうして利根川は江戸と関東全域をつなぐような大動脈へと変貌する。たとえば東北部の産物さえ、鬼怒川を下り、利根川に入っ

て江戸に運ばれたのであり、川ぞいには佐原を代表として多くの商都が栄えていた。

川は大きな流通路だったのである。とりわけ稲作を伴わない山村においては、川の役割は水よりも流れに比重がおかれていた。稲作地帯における川の思想が主として水の思想であるとすれば、ここでは流れの思想が支配した。稲作文化に主導されて育ってきた日本は、現在でもダム建設などにみられるように水の思想が水利問題を支配している。

だが平野部における水管理の思想は逆に②山村では成立しなかった。稲作文化からの疎外の上に山村はなりたつのである。そして現在では山村においてもまた流れの思想が消失しはじめてきている。

今日、川の流通路としての役割は終了した。水道の普及は生活の場としての川の役割も減少させた。そして養殖魚の出現は漁場としての川の魅力も喪失させた。

こうして山村では、川は急速に人間の匂いを失い、景観としての川に変貌していくのである。山村からの川の退廃の進行であった。それは稲作をもたない村の宿命であろうか。

(中略)

山村の生活は主食を買うことによって成立していた。もちろん山の斜面では、麦や粟や稗や黍稷、それに蕎麦をつくっていた。とい

ると言いはじめた。言い分を聞いてなるほどと思った。というのは対岸の主人は一日歩いて約一キロの魚を釣ってきた。当時道路工事などの賃仕事に出ると日当五、〇〇〇円だった。だから主人は自分の一日の労働の成果を、一日分の賃仕事の金額と等価交換しようと試みたのである。

村の基軸的な仕事は今日では道路工事の日当にあることはまちがいない。村人は百姓をやっているには損だと言う。それは農業がもうからないということではなく、賃仕事の日当に比べて率が悪いということである。A 当然のように漁師はこの村でもいなくなつた。山女の養殖がはじまる前、各地で虹鱈の養殖が軌道にのりはじめると、川魚に全国的な市場価格が形成された。山女や岩魚を釣って旅館などに持っていった。また魚も以前のように釣れなくなつた。

漁師は自分の労働の対価を正当に受けることができなくなつたのである。それは漁師という職業がやっていけなくなつたことを意味していた。

山村の生活は昔も今も賃仕事によって成り立っているように思える。そしてこの雑多な仕事をこなしていく生活になれてくると案外住みやすいことも確かである。都市の生活のように単一の仕事に従事することだけが職業ではないということの意味を山村の生活は教えていた。それに気がつく人々は村に帰ってきたくなる。都市で就職した者が山村に帰りがたり、しかし村に住む両親が、帰ってくる者を落伍者とみて息子の帰村を拒否するという逆転現象が各地で生まれたりしているのである。

ただこのような村の生活では、すべてが生活の手段だった。山も川も木も草もである。そして生活手段としての生命を失ったものは次々に見捨てられていく運命をたどる。いま山村では川よりも山のほうが生活手段としてははるかに有効である。

春、雪がとけるとふきのとうにはじまって、秋まで食卓には山のものが次々と出てくる。のびる、たら、うど、ぜんまい、わらび、

みずな、うるい、山栗、栃の実……。だが⑥山の価値はそれだけに  
あるのではない。

いつも行く釣り宿のある集落のまたその上二キロのところ最後に  
の軒家がある。ここには⑦六十を前後した夫婦が住んでいる。驚  
くべきことにこの夫婦は山のものの採取と狩猟だけで暮らしている。  
おばさんは働きものである。五月から十一月まで、それがとれる季  
節には毎日山に入る。村ではこのおばさんが夕方帰ってくると、背  
中の籠のなかに入っているものはいっただって二、三万円は下らない  
と言われている。

【B】出荷できる山菜も狩るけれど、主力は岩茸いわむしという石灰  
岩でできた岩壁にはえるきのこきのこ、※3しのお風鈴の材料となる  
しのおである。がけからロープをおろして、岩肌にもよりのように  
はりついて採取するのである。それ以外にも葉草もとりに行く。  
※4さるのこしかけがガンの薬として評判だったころには、山のよ  
うなこしかけが縁側にほざかれていた。秋には松茸を探しに行く。一  
昨年には一日で三〇万円の松茸をとったことがあるのである。も  
ちろんそんな日は毎日続かない。【C】天然林のある山は限  
りなく豊かである。おばさんは出荷できない山のものを宿に置いて  
いくときがある。去年はマイタケをこちそうになつた。それは松茸  
をはるかに※5凌駕する山のきのこの王者である。

冬はおじさんの出番となつて、うさぎや鹿を追いかけ、穴ごもり  
の熊を撃つ。熊はいまは胆が良い値になるから一頭で三〇万円ぐら  
いで売れるのである。この村の冬の熊猟は男が二人で一組になつて  
おこなわれる。冬眠中の熊をみつめて一人が熊を眠りからさます。  
安眠中をたたき起こされて怒った熊が穴からとび出したところを撃  
つのである。村のベテランになると、ときどき出かけるだけで毎年  
三、四頭の熊を二人で得ている。

それ以外にも山は薪を与え、またきのこの栽培につかう※6櫛くし  
も生みだす。生活手段としての山は無限の財力をもっているのである。  
もちろんそれも植林がふえるに従つて低下はしてきた。雑多な木の

問二 — 線②「山村では成立しなかつた。」とありますが、そう  
なつたのはなぜですか。本文の言葉を使って三十〜四十文字で答え  
なさい。(句読点も数える)

問三 — 線③「このような山村の生活」とありますが、それはど  
のようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答え  
なさい。

ア 山村では広大な土地と豊かな自然を用いて様々な作物を栽培  
できるので、人々は農業の収入だけで余裕をもつて暮らしてい  
る。  
イ 山村の人々は複数の作物を栽培することや、日用品を作るこ  
とで得たお金を使って、生活に必要な品物を買つて暮らしてい  
る。

ウ 山村の人々は稲作以外の様々な作物の栽培や狩猟などで食物  
を得て、稲作をしている地域と物々交換をすることで暮らして  
いる。

エ 稲作を生活の主軸としていない山村の人々は、稲作以外にも  
多様な種類の仕事をする事によって賃金を得て暮らしている。  
問四 — 線④「問題となつたのはその値段のつけ方である。」と  
ありますが、対岸の主人は何を根拠に値段をつけようと判断した  
のですか。「:と判断した。」につながるように、本文の言葉を使  
つて三十〜四十文字で具体的に答えなさい。(句読点も数える)

問五 空欄【A】〜【C】にあてはまる語として最も適当なものを次  
から選び、記号で答えなさい。

ア もちろん イ または ウ つまり  
エ だから オ しかし

問六 — 線⑤「漁師は自分の労働の対価を正当に受けることがで  
きなくなつた」とありますが、それはなぜですか。最も適当なも  
のを次から選び、記号で答えなさい。  
ア 村の基軸をなす仕事は道路工事になつたことにより、森林を  
はじめとする自然が失われた結果、川魚がまったく釣れなくな

はえる自然林こそ、動物にとつても、植物にとつても、人間にとつ  
ても棲みやすい。山村の職業が雑多な仕事から成り立つのが一番暮  
らしやすいように、山も単一の植物からできてはならないので  
ある。

山は現金収入の手段を与えている。反対に川は生活手段の対象と  
してはうすれてきた。山村の人々が川に対して関心を失っていく理  
由はそこにあつたように思う。山の生活は新しい現金収入の道を  
次々と生みだし、次々と失っていくことから成立するのである。い  
まは公共事業としての道路工事がある中心にすわり、日当本位制の  
ような経済が村を支配する。そうであるかぎり川は荒れつづける運  
命にあるのかもしれない。

(内山 節「山里の釣りから」)

※1 薪:切り株などを燃料用にとくに加工したもの

※2 落伍者:人生に遅れを取つたり、悪い方向に行つて落ちぶれてしま  
つた人

※3 しのお風鈴:竹や針金を芯にして、その上にしのおの根茎を巻き付  
ける風鈴

※4 さるのこしかけ:キノコの一類

※5 凌駕:他のものを越えてそれ以上になること

※6 櫛:切り株などをそのまま自然に近い状態で燃料にするもの

問一 — 線①「利根川」についての説明として最も適当なものを  
次から選び、記号で答えなさい。

ア 人工的に掘られた赤堀川と、銚子へと流れていた常陸川とを  
つなげることで現在の利根川の水路が作り出された。

イ 瀬替工事が行われた利根川では、江戸湾へと流れ込む前にい  
ずれの小河川へも合流することはなかった。

ウ 江戸時代中期から瀬替工事が行われたことで、利根川は江戸  
と日本全域をつなぐ大きな流通路となつた。

エ 多摩川・入間川・荒川を流通路としている利根川は関東の産  
物のみを運ぶことに利用されていた。

つたから。

イ 養殖魚の方が人間の管理の下で育てられているため、安心し  
て食べられるということから、世間では川魚の需要が低下して  
いるから。

ウ 川魚の養殖が軌道に乗ると、川魚に全国的な市場価値が形成  
され、漁師が釣った魚が以前と同様の水準で取引されなくなつ  
たから。

エ 山村の過疎化が進み、釣りの名人が減つてしまったことで、  
天然の川魚の値段が高騰してしまい、一般の人々に売れなくな  
つたから。

問七 — 線⑥「山の価値はそれだけにあるのではない。」とあり  
ますが、「山の価値」が高いことを表現している部分を、本文か  
ら十〜十五文字で抜き出して答えなさい。(句読点も数える)

問八 — 線⑦「六十を前後した夫婦」とありますが、筆者はこの  
例を挙げて何を説明しようとしているのですか。最も適当なもの  
を次から選び、記号で答えなさい。

ア 栄えた地域とは離れた場所にある山村であっても、人々は裕  
福な生活を送ることができるということを説明しようとしてい  
る。

イ 様々な木の生える天然林だからこそ山は豊かであり、あらゆ  
る生き物にとって棲みやすいのだということを説明しようとし  
ている。

ウ 定年がある企業とは異なり、山村では年老いても仕事があり、  
お金を稼ぐことができるということを説明しようとしている。

エ 人間が動物を獲ることで山の生態系が維持され、様々な動植  
物や豊かな自然が守られているということを説明しようとして  
いる。

問九 次のうち、本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で  
答えなさい。  
ア かつて川は植物や動物にとつて必要な水を提供する唯一の手

段であったが、今は大規模なダムが建設されたことで水を提供  
する手段が増え、川の必要性が薄れていった。

イ 現代において川は人間に恵みをもたらしてくれないので、そ  
の豊かな水源を利用して観光資源として開発する方が効率よく  
利益を得られると考えられるようになった。

ウ 環境破壊が進み、山村の人々は天候に左右される農業で生計  
を立てられなくなったので、都市に出て企業に勤務する機会が  
増え、次第に自然に興味を持たなくなった。

エ 山村の人々は山が与えてくれる現金収入の手段を生活の基本  
として重要視した一方で、生活手段としての側面を失っていつ  
た川に対する関心は次第に薄らいでいった。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題作成上、  
本文に省略した部分があります。)

女子サッカーの有力選手であった椎名葵は、藤沢女子中学  
校から神南学院高等部(通称 神高)に入学した。入学早々、  
生徒会長の晴人から生徒会に勧誘されるが、葵は入会を断っ  
た。四月の球技大会の時、葵は怪我をした生徒の代わりとし  
て、男子サッカーの試合への出場を依頼される。その時相手  
チームにいた晴人は、「試合に負けたら生徒会へ入会するこ  
と」を条件に出場を許可した。以下は、試合に負けてしまっ  
た葵の前に、一人の少女がやって来る場面である。

彼女の名前は、花岡美月。小学生の頃は、葵と同じサッカーク  
ラブに所属して、共に戦った仲間だ。しかし、進学を機に彼女は鎌北  
中に入學し、全国大会への切符を賭けた試合で、葵の属する藤沢女  
子と激しく競った。彼女は葵のライバルにして、友だった。  
美月と再会したあと、周囲の視線を気にした葵は、彼女を連れて  
屋上に向かった。

「いくら軽傷でも、怪我した時は休め」と、今なら言える。でも、  
あの時は監督やチームメイトたちの期待を裏切ることができず、無  
理を押して試合に出場し……靱帯断裂という重傷を負ってしまった。  
身体のできあがっていない中学生は、大人みたいに手術で膝を治  
すことができない。葵はたった一度の無茶でプロへの道を断たれ、  
癒えない傷を心に負った。一方、美月が率いる鎌北中は、エースの  
葵が抜けた藤沢女子に勝って、全国大会に進み、初優勝を飾った。  
なんであの時、美月を助けちゃったんだろう？ 彼女は友人であ  
る前に、ライバルだったのに。どうして助けた方の自分が、②こん  
なつらい目に遭わなきゃならないんだろう？

葵は何度も自らに問い、悩んで、後悔した。そのたびに、こんな  
ことを考えてしまう自分自身がどうしようもなく汚い人間に思えて  
しまって、泣いた。

すべてが嫌で嫌で仕方なくて……葵は心にきつくフタをし、見て  
見ぬ振りをしながら、毎日をやり過ごす術を覚えた。それなのに、  
今になって、そのフタをこじ開けに来るなんて！

「お願いだから、私に関わらないで！ 私ほもう『藤沢女子の椎  
名』じゃないから」  
心を絞るようにして、かろうじて想いを口にした。うつむく葵の  
前に、美月がさらに一步踏み出してきた。

「じゃあ聞くけど、あんた、サッカーのことはもう完全に吹っ切れ  
たの？」

「……………うん」  
「本当？ なら、さっきの試合で、どうしてあんな楽しそうにボー  
ルを蹴ってたの？ 勝ち逃げなんてやめてよ！ 正々堂々と勝負し  
て、あんたを打ち負かすことが私の目標だったのに！ どうしてあ  
の時、私なんか助けたのよ!？」

「……………は？ なにそれ!？」  
人に助けてもらっておきながら、なんて言いぐさだろう。さすが  
の葵もカチンときて、美月をにらみつけた。

サッカーの決勝戦の最中とあってか、時折ここまで歓声が聞こえ  
てくる。中途半端な沈黙の中、先に口を開いたのは美月だった。  
「なんの連絡もなく来ちゃって、本当にごめんね。でも私、どうし  
ても葵に会いたくて」

「私が神高にいるって、どうやって調べたの？」  
「藤沢女子の監督に聞いたから、すぐに教えてくれたよ。あの人も、  
あんたのこと、すごく心配してたから」  
「そう……」

① 余計なことをしたと、監督を責める気にはなれなかった。葵自  
身、彼に心配をかけまくった自覚はあったから。だけど、美月にだ  
けは、連絡先を教えてほしくなかった。今の自分を彼女にだけは見  
られたくなかった。

押し黙った葵を見て、美月が意を決した顔つきで、一歩前に出た。  
「今日の試合、見せてもらったよ。おかげで少し安心した。あんな  
ことがあったあとでも、あんたらしさがプレーに残ってたから」  
「……………」

「葵、もう一度サッカーをやろう！ あれだけ動けるなら、すぐに  
復帰できるよ！」  
「……………無理だよ」

「どうして!? あんたはどんなに厳しい試合でも、最後まで絶対に  
あきらめない子だったじゃん！ 私にできることなら、なんでもす  
るから」  
「もうやめて！」

葵は耳をふさぎ、下を向いた。もう、限界だった。ダメだと思っ  
ても、止めることができない。美月の善意が引き金となって、封印  
してきた記憶が一気にあふれ出す。

最初に葵の脳裏をよぎったのは、自分に向かって落ちてきた美月  
の背中だった。中学最後の夏、決勝前にトイレに行こうとした葵の  
前で、美月が階段から足を踏み外したのだ。葵はとっさに美月を抱  
き止めたが、うまく踏みとどまらずに転び、足首を捻挫した。

③ 葵は、言葉を失った。あの気丈な美月が、泣いていた。  
「私のことなんか、放っておけばよかったのに……! いい迷惑な  
のよ! 私がわざと葵に怪我を負わせたとか、葵がいれば優勝なん  
てできなかったらどうか言われて! もう一度勝負してよ、葵!  
私にできることなら、なんでもするから!」

美月の痛々しい絶叫に、葵は初めて彼女の本音を垣間見た気がし  
た。今までなにも言わなかっただけで、助けられた側の美月も苦し  
んでいたのだ。友人の未来を奪ったことに罪悪感を覚え、行き場の  
ない暗闇の中を、ずっと一人でさまよっていたのかもしれない。

できることなら、葵だって、また美月と勝負をしたかった。最高  
のライバルにして、友人でもある彼女と切磋琢磨しながら高みを目  
指せたら、どんなに楽しいだろうと思う。だけど、それはもう叶わ  
ぬ夢だと知っている。

「ありがとう、美月。あんたの気持ちだけ、受け取っておくよ」  
「……………どうしても、ダメなの？」

「体育のサッカーならできるぐらいには、回復したよ。でも、今の  
私の足じゃ、昔の私を超えることは絶対にできない。それでも、あ  
んたは私にサッカーを続けろって言うの？」  
「それは……」

本気でプロを目指したことがある者なら、今の言葉の重みがわ  
かっただろう。現実には、残酷だ。④ 絶対に叶わぬ夢を前にして、努  
力を続ける勇気も無謀さも、葵にはなかった。

「もう昔の私に戻ることはできないんだよ。なら、頑張っただけ進  
むしかないじゃん!」  
葵の頬を、熱い涙が伝い落ちていく。何度も自分に向かって言い  
聞かせ、納得したはずの答えなのに、口にする涙が止めどなくあ  
ふれてくるのは、なぜだろう？

「葵、ごめん! 本当にごめん!」  
美月が葵の身体を抱きしめた。ギョッと力のこもった腕の中で、  
葵は彼女のささやくような本音を聞いた。

「あの時、助けてくれてありがとう。でも、やっぱりやさしいの。私、あなたのプレーが、本当に好きだったから……」

⑤ この子はなんで今頃になって、本心を打ち明けるんだらう？もつと早くに知っていたら、自分たちの関係も違っていたかもしれないのに……。

腕の中に、互いのぬくもりを感じる。言葉もなく、二人で泣き続ける。その耳に「際大きな歓声が聞こえてきた。今は遠いフィールドで、サッカーの決勝に決着がついたようだった。」

四月の暖かな太陽が、ゆっくり沈んでいく。美月と二人で互いに涙も涸れるほど泣き続け、溜めこんでいた感情を吐き尽くしたあと、葵は彼女を校門まで送って行った。「また会おう」とは、言わなかった。互いの道が交わることはもうないと、二人とも察していたから。

葵は一人だけ戻ってきた屋上で、手すりに身を預け、静かに目を閉じた。このまま一年くらい過ぎてしまえばいいのに、と願う。そうすれば、次に目を開けた時には、この胸の奥底でうずく痛みも、やるせなさも、すべて消えているかもしれないのに。

葵が胸の上でそっと手を重ねた。その時、後ろで扉の開く気配を感じた。肩越しに様子を窺う。葵は自らの不運を呪って、うめきそうになった。

屋上に現れたのは、⑥ 晴人だった。彼は、葵の泣きはらした顔を見て驚いたようだったが、そのことには一切触れずに近づいてきた。「教室にもグラウンドにも姿がないと思ったら、こんなところにいたんだな。捜したぞ」

「捜すって、なんで私を……あー」  
葵は自分の置かれている状況を思い出した。美月のことがあったせいで、すっかり忘れていたけれど、生徒会への入会を巡って晴人と勝負し、負けたのだ。彼は早速、入会の手続きをしに来たに違いない。

晴人を前にして、全身を緊張させる。見ていた晴人が、プツと吹き出した。

「なにをだ？」

「前に会長、言っていましたよね？ これから頑張って探せば、今まで気づかなかった第三の道だって、見つかるかもしれないって。この神高で、私はサッカーみたいに夢中になれることに、また出会えると思いますか？」

葵の問いかけに、晴人はうなずくことも、首を横に振ることもなかった。代わりに、彼は葵の眼差しを正面から受け止めたまま、ゆっくりと答えた。

「お前がこの先、神高でなにを見つめるか、俺にはわからない。すべてお前次第だ。だが、迷ってるなら生徒会へ来い。生徒会でなら、⑧ その答えを見つけれられるかもしれないぞ」

「……会長」

「なんだ？」

「勧誘がうまくありませんね」

「当然だ。俺は神高の生徒会長だからな。人心を掌握できなければ、トップは務まらない」

晴人がニヤツと笑って、胸を張る。いつもの彼らしい仕草に、葵もつられて笑った。  
四月の暮れゆく空の下で、そっと目を閉じ、胸に手を当てる。つらくて仕方ない過去が消えてなくなることも、この胸の傷が完全に癒えることも、きつと一生ない。この先いくら頑張ったって、サッカーみたいな夢中になれることを見つけれられる保証だって、どこにもない。

それでもいい。弱く、傷ついた自分を認めること。恐くて震える足でも、逃げずに現実と向き合い、前に進もうとすること。それが、今の葵にできる精一杯だった。

問一 — 線① 「余計なことをしたと、監督を責める気にはなれなかった。」とありますが、葵がそう思った理由として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

（麻希一樹「未完成」なほくらの、生徒会）

き出した。

「そんなに警戒するな。俺は、詐欺師でも悪魔でもないんだから」

「似たようなものだと思いますけど」  
葵が、我ながら的確だと思つたツツコミを、晴人は無視することに決めたらしい。彼はこちらの顔を見たまま、めずらしく穏やかな口調で続けた。

「実はな、お前に伝えたいことがあって、捜してんだ」

「なんですか？」

「そんな……」  
どうせ自分に勝つたから、喜んでいただけだろう。葵はいらついて、つい意地の悪いことを考えてしまった。⑦ しかし、次の瞬間、そう思ってしまった自分を恥じた。

晴人が嬉しそうにほほえんでいた。その眼差しは、普段の彼からは想像もつかないほど優しげで、やわらかい。彼が試合直後に見せた、あの笑顔と同じように。

晴人と向き合っているうちに、一つの推測が葵の頭に浮かんだ。どうやって調べたのか知らないが、彼は自分が怪我でサッカーをやめたことも、おそらくは神高に来た理由も把握しているようだった。

彼は、それらのことをすべて承知した上で、自分に過去と向き合うチャンスを与えるために、あえてサッカーの勝負を挑んできたのではないのか？……って、いやいや！ いくら晴人が優秀だとしても、さすがにそこまでは考えていないだろう。

いつになく穏やかな晴人の顔からは、その真意を汲み取ることはできない。今なにを考えているのか、聞いてみたい気がするけれど、聞かない方がいい気がする。

（中略）

「会長、教えてもらえませんか？」

ア もう以前のようににはプレーできない今の自分を見られなくなかった。美月とは会いたくなかったが、監督には心配をかけてしまったという後ろめたさがあったから。

イ 今の自分を見られたくなかった。美月とは会いたくなかったが、監督には二人を再会させようという意図があることがわかり、しかたがないとあきらめていたから。

ウ ライバルである美月に自分のプレーを見られて研究され、弱点を見透かされてしまうと不安になったが、心配をかけた監督の判断ならば受け入れるしかないと思つたから。

エ ライバルではあるが、親友でもある美月とは、自分の気持ちの整理がついてからゆっくり会いたいと思つていたが、監督はそんな気持ちを知るよしもなかったから。

問二 — 線② 「こんなつらい目」とありますが、それはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 不注意で自分に怪我をさせた美月が悪いのに、すべてが自分の責任であるかのように言われたこと。

イ 自分が怪我をしたことで親友だった美月を恨んでしまい、自分自身が汚い人間に思えてしまったこと。

ウ ライバルの美月を助けたことで、致命的な怪我をしてしまい、それがチームの敗戦につながったこと。

エ 怪我をしたことでサッカーだけでなく、学校生活のすべてが嫌になり、毎日に引きこもっていたこと。

問三 — 線③ 「葵は、言葉を失った。」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 美月の身勝手な言いぐさに、憤りを感じていたら、実は彼女が泣いていることに気づき、普段の彼女との落差に驚いたから。

イ 美月が自分に怪我をさせてしまったことをずっと苦しんでいた、涙を流して謝罪してくる姿に申し訳なさ募ったから。

ウ 美月を助けたせいで自分が怪我をしてしまったのに、泣いて「助けなくてよかった」と言われたことが心外だったから。

エ 美月は自分にとってよきライバルだと思っていたのに、涙を流すような気の弱い一面を見せられてがっかりしたから。

問四 — 線④「絶対に叶わぬ夢」とありますが、どのようなことですか。本文の言葉を使って三十五〜四十字で答えなさい。(句読点も数える)

問五 — 線⑤「もつと早くに知っていたら、自分たちの関係も違っていたかもしれないのに……。」とありますが、この時の葵の美月に対する心情はどのようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 美月がもつと早く自分のサッカーの実力を評価してくれていたら、本格的に競技を再開する決意をしていたらというところ。

イ 自分ももつと早く美月の苦悩を理解できていたら、お互いのわだかまりも消え、ここまで疎遠にはならなかっただろうということ。

ウ 美月にもつと早く自分の選手生命を奪ったことを話せていたら、絶縁することができたので、このように再会しなくて済んだはずだということ。

エ 自分ももつと早く美月の謝罪を受け入れていたら、お互いを傷つけたまま別れてしまった辛い過去も清算できただろうということ。

問六 — 線⑥「晴人」とありますが、晴人はこの場面では葵にとってどのような存在として描かれていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 困った時には的確な助言を与えてくれるが、目の前になると緊張を強いられる存在。

イ 自分の生活態度に厳しい指導をしてくれるが、素直に反省する気持ちになれる存在。

ウ 泣いている自分に対して穏やかに接してくれるが、今一つ気を許すことができない存在。

#### 四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

信濃の国に更級といふ所に、①男すみけり。若き時に、親は死にければ、※1をばなむ親のごとくに、若くよりそひてあるに、この妻の※2心愛きことおほくて、この姑の、老いかがまりてあるを、つねに②憎みつつ、男にもこのをばの※3御心のさがなくあしきことをいひ聞かせければ、むかしのごとくにもあらず、おろかなることおほく、③このをばのためになりゆきけり。このをば、いといたう老いて、※4ふたへにてゐたり。これを④なほ、この嫁、※5ところせがりて、今まで死なぬことと思ひて、よからぬことをいひつつ、「もていまして、深き山に捨てたうびてよ」とのみ責めければ、責められわびて、⑤さしてむと思ひなりぬ。

(大和物語)

※1 をばなむ親のごとくに…「をば」が親のように

※2 心愛きこと…不愉快なこと

※3 御心のさがなく…心の性質がよくない

※4 ふたへにて…体が折れ重なるように腰が曲がって

※5 ところせがりて…じゃまでわずらわしいと思つて

問一 — 線①「男すみけり。」を現代語訳しなさい。

問二 — 線②「憎みつつ」について、「憎む」は現代語で「いやだと思ふ」という意味ですが、妻は「をば」のどんな様子をいやだと思つているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 妻に意地悪する様子。

イ 昔のことばかり話す様子。

ウ 男のことを大切にしない様子。

エ 腰が曲がっている様子。

問三 — 線③「このをばのためになりゆきけり。」とありますが、男の「をば」への接し方はどうなったのですか。「大切」という言葉を使って十〜十五字で答えなさい。(句読点も数える)

問四 — 線④「なほ」を現代仮名遣いに直しなさい。

エ 本当の意図はよくわからないが、今後の自分自身を考える機会を与えてくれた存在。

問七 — 線⑦「しかし、次の瞬間、そう思ってしまった自分が恥じた。」とありますが、以下は、この時の葵の心情を四人の生徒が話し合っている場面です。本文の内容にあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A「晴人が嬉しそうにほほえんでるし、普段の彼からは想像もつかないほど優しいと葵は感じているね。」

イ 生徒B「怪我でサッカーをやめたことや、神高に来た理由を晴人が知っているのではないかと葵は推測しているね。」

ウ 生徒C「晴人がすべてを知った上で、自分に過去と向き合うチャンスを与えようとしていると葵は確信したんだよ、きつと。」

エ 生徒D「晴人がいつになく穏やかだから、葵は晴人の真意をはかりかねているよね。自分から聞けばいいんだろうけど、なかなか聞けないみたい。」

問八 — 線⑧「その答え」とありますが、誰のどのような問いに対する「答え」のですか。本文の言葉を使って、三十五〜四十字で答えなさい。(句読点も数える)

問九 この文章の表現上の特色として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 短い文を積み重ねること、起こった出来事が時系列で客観的に語られている。

イ 文中に「……」を多用することで、主人公の優柔不断な性格が表現されている。

ウ 主人公の心情の変化が、登場人物との対話を通じて劇的な展開で描かれている。

エ 過去に起きた大きな事件の真相が、様々な登場人物の視点に立って描かれている。

問五 — 線⑤「さしてむと思ひなりぬ。」とありますが、男はどうしようと思ったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「をば」のために深い山奥に家を建てよう。

イ 「をば」と妻が仲良く暮らせるよう、二人の仲を取り持とう。

ウ 「をば」によって深い山奥に捨てられた持ち物を拾ってこよう。

エ 「をば」を深い山奥に捨ててしまおう。

番号
氏名

評点
100

①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧
⑨	⑩

二 問一
---------

問二
問三
問四
問五
問六
問七
問八
問九

問四
問五
問六
問七
問八
問九

A  
B  
C  
問六

問七
問八
問九

三 問一
問二
問三

問四
問五
問六
問七
問八
問九

四 問一
---------

問二
問三
問四
問五

推定配点	
問一 各2点×10	問一 3点
問二 各2点×3	問二 4点
問三 各3点×3	問三 3点
問四 5点	問四 4点
問五 2点	問五 3点
問六 各3点×2	問六 3点
問七 各3点×3	問七 4点
問八 2点	問八 3点
問九 3点	問九 3点
計	100点

(注) この解答用紙は実物を縮小してあります。192%拡大コピーすると、ほぼ実物大で使用できます。(タイトルと配点表は含みません)